

処方構成ではあるが、一般的に養血を目標として婦人門で用いられる四物湯を駆瘀血剤として用いている。以上、金瘡治療の発展にともない用いられるようになる内服薬の生薬と白朝散を照合すると多くが一致する。つまり白朝散は、駆瘀血を目標とした四物湯、気付（人参、甘草、茯苓）、清熱瀉下・血下しの（大黃、当歸）、芳香性生薬（陳皮、紫檀、縮砂、木香、沈香、白芷、藿香）の4つの構成からなっている。白朝散は金瘡治療が発展する中で培われた総合的な処方であると位置付けられる。伴越前流の太白散や山田振薬などのその他の金瘡処方も4つの枠組みを持っていると考えることができる。

善鬼流の内服薬は白朝散一つだけであり、総合的な処方として扱われていたことが伺われる。白朝散の主治には、「治金瘡血乱」（『金瘡秘書』）があげられており、その他の細かい症状には、生薬を加えたりあるいは処方内から削ったりする加減方で対応している。中心的な処方と加減方で治療する「基本処方と加減方」の体系は同時代の本道における田代三喜の治療にもみることができる。しかし、白朝散の加減方が本道のそれと異なるの

は、本道が様々な生薬を新たに加えることで症状によって多様な処方構成がとれるのに対し、白朝散の加減方にあげられる生薬は多くは白朝散の構成生薬の中から選ばれており、構成の変化は限定的である点である。こうした限定的な加減方を『源氏白薬金瘡秘伝方』では「内加減」と定義している。つまり内加減とは「基本処方の構成生薬の分量や比率を変えて加減方のように症状に対応する」ということである。限られた生薬で加減を行う背景には、戦地では手に入る生薬が少ないという状況がある。また、それだけ白朝散が幅広い症状に対応できる処方とみなされていたと考えることができよう。善鬼流及び白朝散自体は江戸時代に入り姿を消すが四物湯・気付・血下し・芳香性生薬といった構成を持つ金瘡処方は婦人科領域で売薬として広く用いられ、幅広い適応をもつ万能薬的な処方に発展したりする。善鬼流等の金瘡治療における限られた生薬で広くに対応するといった体系が後世において発展をとげたと思われる。

（平成22年1月例会）

『資料集 日本の精神障害者（戦前篇）』編集にむけて

岡田 靖雄

会員である小峯和茂、橋本明両氏の協力をえて、『資料集 日本の精神障害者（戦前篇）』を、不二出版から出すことにした。閲覧しやすいもの、国会図書館でデジタル化されているもののはのぞいて、原資料を縮小複写するものである。

歴史研究において、基礎となる史料の重要性はいうをまたない。そして、貴重な史料（資料）がきえていくのを目にしてきたので、資料集刊行の必要性を痛感している。

呉秀三・榎田五郎『精神病患者私宅監置ノ実況』（1918年）は、日本精神医学の原点をなすもので

ある。同志・故吉岡真二は各地の図書館でその所在をたしかめようとした。「目録にあるが現物がない」、「あったが去年廃棄した」という答えが、いくつかの館からえられた。東京大学医学図書館の「病院未整理図書」の棚に、これが3冊あった。1冊もちだしたかったが、できなかった。数か月後には、3冊とも「整理」されていた。現在この内務省本のたしかな所在は、私蔵をふくめて2冊だけである。呉がはじめた精神病患者慈善救済会の会報は第60号まででたが、最後のほうしかのこっていない。市川にあった国立精神衛生研究所の所

長をした村松常雄は、松沢病院医員の頃、会の書記をしていた。そして会報数冊を村松は研究所図書室に寄贈しており、わたしはその複写をとった。数年後にその現物をもう一度たしかめにいったところ、なくなっていた。

同志吉岡は京都岩倉の精神病患者私宅看護の歴史にとりくみ、30年あまりか岩倉にかよい、資料をかいつめてもいた。きくと、「今まで3000万ぐらいつかったか」とのことだった。岩倉研究のまとめをするよう、何度かれにうながしたか。「もうちょっとしらべてから」がかれの答えで、そして、まとめをせぬままにかれは世をさった。岩倉研究者は、吉岡さんのあつめたものを是非みたいと熱望しているが、かれの子息は、「いずれは国会図書館にでも寄贈しましょうか」といっているだけである。

わたしは、吉岡の協力もえて50年資料をあつめてきた。勤務医にたかい物はかえない。といっても50年古書展にかよっていれば、かなりの物があつまっている。中古マンションをかって「青柿舎」と名づけて、そこにうつした資料は週1日人をたのんで整理してもらっている。といっても、自分がしんだあと、子にとってはそれはゴミの山だろう。古書としてうれば、買い値の何分の一か。

精神医学史学会があるが、大勢は外国の学説史にむいていて、日本の精神科医療史を地道につみあげていこうという方向はまだよわい。この資料集がその方向への刺激となれば、とおもう。

ところで、資料復刻にはおもわぬ落とし穴がある。精神医学神経学古典刊行会(創造印刷→創造出版)は1973-1979年に16冊の復刻本を刊行したが、それはよい反面教師である。この復刻本は原本の奥付けをいれなかったので、4冊で奇妙な事態が生じている。そのもっともよい例は、石田昇『新撰精神病学』で、そこには1907年の初版・第2版緒言だけのせている。この本の早発性痴呆のところを、「最近にブロイラーは分裂病 Schizophrenie と命名せるが」とある。クレペリンの Dementia praecox に、ブロイラーが Schizophrenie の名称を提唱したのは1908年で、あたかも石田

が予言したかである。実は復刻されているのは、おそらく第8版(1918年)なのである。

日本精神神経学会の前身、日本神経学会は1902年4月4日に創立された。その機関誌『神経学雑誌』の創刊の日付けがわからない。いくつの医学図書館で、製本されたこの雑誌をさぐったろうか。ところが、小峰研究所にはこの雑誌が製本されない原型で保存されていた。創刊号表紙には、明治35年4月1日発行とあった。製本のときは、表紙、広告部分をのぞくのが通例である。日本神経学会の会告・会報部分は初期には、赤紙の広告部分にはいっていた。

これらの例から復刻にあたっての重要教訓がみちびきだされる。

さて、この資料集には、精神病患者監護法(1900年)よりまえの資料、巢鴨病院・松沢病院関係、東京帝国大学関係、その他の公立病院、私立病院、精神病患者監護法・精神病院法、私宅監置、各国の情勢、保健衛生調査会報告書、精神病患者慈善救済会、講義録・教科書、精神科看護、酒害関係、植民地、調査・統計、その他、立法議事録(精神病患者監護法、精神病院法)の各項目にわけて、資料をおさめる。刊行は2010-2011年で、数冊のものになるだろう。

上記の各項目につきのべる余裕はない。一つだけあげておこう。戦前の精神病院看護人(男、女ともふくめての呼称)の待遇はきわめて劣悪であった。ふるい看護長から、「ま、隠亡の一段上ですかね」ときいていた。ひどいので、つとめても2、3日でやめる人が続出した。そこで患者の食物をかすめとる人もおおく、患者の衣類を質に入れて吉原通いする人もでた。こういったことは、ここにおさめる患者手記「東京府巢鴨病院」(1898年)および読売新聞連載「人類最大の暗黒界瘋癲病院」にしるされている。松沢病院看護科にあった看護人身分帳から、何人かのものをぬきだした。戦前には、精神病院に労働争議がいくつかあった。そのときのピラなどが何枚か小峰研究所にのこされていた。このピラも収録してある。

さて、力がのこっていれば、戦後篇資料集をだ

したい。それは、ライシャワ大使刺傷事件につづく1965年の精神衛生法改正までとなるだろう。これに並行して写真資料集もほしい。これは、いままでとりためたスライドがある。

国会図書館でのデジタル化がどこまですすむかは気がかりである。精神病患者監護法前の問題として、旧相馬藩主の監禁・入院をめぐるであらそわれた相馬事件がおおきい。当時この事件につきだされた本は、あつめただけでも40冊をこえるだろう。財産横領をねらった陰謀と主張する旧藩士錦織剛清側のものは、記録文学あるいは実録

として、2冊が文学全集にはいつている。そこで、相馬家側の『晴天白日相馬実伝』（1893年）をいれたかったが、すでにデジタル化されているというので、これをいれることは中止した。

ただ、今回の資料集でも、そこに入れたものの多くは、国会図書館にはいつていない、小部数の、あるいはいわば“局所的な”ものである。デジタル化がすすんでも、こういった資料集の必要性はかわらぬのであるまいか。

(2010年1月例会)

書籍紹介

篠田達明 著

『日本史有名人の臨終図鑑』

今まで「徳川将軍家十五代のカルテ」「歴代天皇のカルテ」等の好著を世に送られた篠田達明氏が送り出したカルテシリーズ第3弾。

雑誌「歴史読本」に連載したものの集大成であるところから、「れきどく」養生所の名前を付けて、そこで扱った患者のカルテを公開するという形式を取り、作者である篠田氏がその院長という設定で診断を下している。

総数111人の臨終直前のカルテであって、わずか8歳で亡くなった7代将軍徳川家継から、96歳で亡くなった牧野富太郎までを取り上げている。順序として、20歳代までに亡くなった人々9名、30代で亡くなった人々11名、……90代で亡くなった人々4名というように年齢ごとに紹介する。それこそ日本史上で有名な将軍、武將、政治家、作曲家、参謀、歌人、俳人、公卿、詩人、小説家、画家、浮世絵師、あらゆる職種の人々を網羅する。

表現には1人物ごとに見開き2ページをあて、要領よくまとめようとしているが、何分スペースに制限があって全貌を尽くしきれない不便も

あったと思われる。

右ページは、主人公の死亡年齢とともに、生涯を短く簡潔に語っている。

たとえば樋口一葉の欄では、25歳で死んだこと、18歳の頃から女戸主として苦勞のなかに一家を支え、頭痛肩凝りが持病となり、不朽の名作を遺したが、明治29年の春頃から喉の不調を訴え、夏には39度の高熱が表れ肺結核の診断を受ける。森鷗外の紹介で東大病院の青山教授の診察を受けたが、すでに絶望的で11月23日不帰の客となった次第を述べている。

一方、左ページは全面枠組で、共通した様式をとっている。大別して上下二欄になっていて、上欄は保険証をもとに病院受け付けが記入する受診者欄であり、下欄は医師が記入する病状欄である。受診者欄には、氏名・生年月日・出身地・現住所・診療日・父母・職業など。病状欄はさらに分かれて、家族歴・既往歴・現病歴・現症・留意点および今後の方針・臨床診断名・担当医名の欄が設けられている。一見して明瞭、興味のある欄を見ればよい。担当医欄には、実際に治療にあ